群馬県前橋市

二之宮鶴谷遺跡

村づくり交付金事業荒砥北部地区汚水処理場施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

２００７

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。

市域は豊かな自然環境に恵まれ、２万年前から人々が生活を始めました。そのため市内のいたる所から、人々の息吹を感ぜられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋の地は、800 余りの古墳が存在していたように、上野毛の国の中心地として栄え、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、上野国分僧寺、上野国分尼寺、上野国府など重要な施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され、日本の発展の一翼を担いました。

二之宮鶴谷遺跡は、赤城山南麓の二之宮町に位置し、村づくり交付金事業に伴う発掘調査です。調査の結果、平安時代の天仁元年（1108 年）の浅間山噴火に伴う軽石に覆われた水田跡が発見されました。

残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、期間の制約された中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成 19 年 12 月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　　砂　川　次　郎

例　　言

1．本報告書は、村づくり交付金事業荒砥北部地区汚水処理場施設建設に伴う二之宮鶴谷遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団から委託を受けて、山武考古学研究所が、同調査団の指導のもとに実施した。

3．遺跡の所在地・調査面積・調査期間ならびに担当調査員は次の通りである。

所在地　　群馬県前橋市二之宮町88・89番地

調査面積　2,000㎡

調査期間　平成19年10月11日～同年10月25日

調査員　　折原洋一（山武考古学研究所）

4．本書の編集は、折原洋一が行い、第Ⅰ章を梅沢克典（前橋市教育委員会）が、第Ⅱ～Ⅴ章を折原洋一が執筆した。

5．調査に関しては、下記の諸機関にご協力・ご指導をいただいた。

前橋市教育委員会　アコン測量株式会社　ＪＴ空撮　星野重機

6．遺跡の出土遺物・写真・図面等の資料は、前橋市教育委員会が保管している。

7．発掘調査の参加者は次の通りである。

新井国昭　牛窪甲司　牛窪和夫　角田早三郎　佐藤安男　高田進弘　中沢泰代　福田鈴美　牧野完一

松田　実　綿貫英一　綿貫　晃

凡　　例

1．挿図中に使用した方位は、国家座標（世界測地系）北である。

2．挿図第１図は、国土地理院発行五万分の一『前橋』を使用した。

3．遺構の名称は、次のように表示した。

溝・流路：SD

4．掲載したスクリーントーンは、以下を示す。

浅間山降下火山灰Ｂ軽石層

攪乱

Ⅵ層以前の流路露出面

目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 5
　第１節　遺跡の立地 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第Ⅲ章　調査の方法と経過 …… 6
　第１節　調査方法 …… 6
　第２節　調査の経過 …… 6
　第３節　基本層序 …… 6
第Ⅳ章　遺構・遺物 …… 8
第Ⅴ章　まとめ …… 14

挿図目次

第１図　遺跡位置図（1/50,000）…… 1
第２図　遺跡と周辺の遺跡（1/1,000）…… 2
第３図　遺跡周辺の地形（1/2,500）…… 3
第４図　調査区域図（1/500）…… 4
第５図　基本層序 …… 7
第６図　遺構配置図 …… 9・10
第７図　水田址水口・SD01水口 …… 11
第８図　SD01 …… 12
第９図　溝セクション図 …… 13
第10図　出土遺物 …… 13

表目次

第１表　周辺の遺跡 …… 5
第２表　土器観察表 …… 14
第３表　石器・石製品観察表 …… 14

図版目次

図版１　１　全景
　　２　遠景　南から
図版２　１　水田址北部近景　南から
　　２　水田址南部近景　西から
　　３　水口１　南から
図版３　１　水口２　北から
　　２　水口Ｂ　西から
　　３　水口Ａ　南から
図版４　１　SD01 北から
　　２　SD01　南から
　　３　SD01 セクション
図版５　１　SD02　北から
　　２　SD03　北から
　　３　SD02・03セクション
図版６　１　SD04　北から
　　２　SD04セクション
　　３　SD05　南から
図版７　１　SD05セクション
　　２　SD06　北から
　　３　SD06セクション
図版８　出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯

平成 18 年度に前橋市より二之宮町地内で村づくり交付金事業荒砥北部地区汚水処理施設建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議を受けた。当該事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地には属していないが地形、周辺遺跡の調査状況を考慮し、事前に試掘調査を実施する必要が生じた。

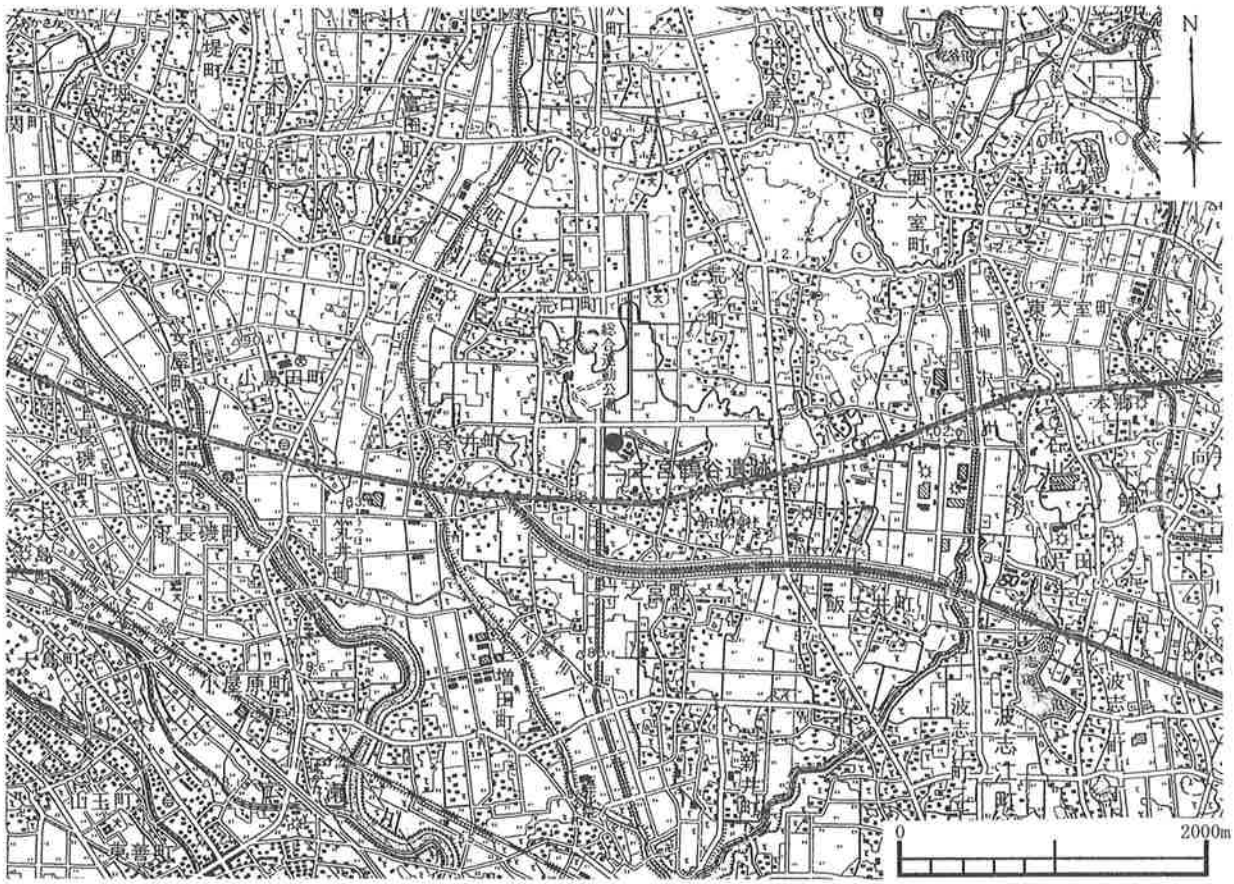
平成19年１月30日に事業課である前橋市農村整備課から試掘調査依頼書が前橋市教育委員会に提出された。これを受けて教育委員会では平成19年２月14日～２月16日にかけて試掘調査を行った。調査の結果、平安時代の水田跡を検出し、現状での保存が不可能との事から、記録保存を目的とした発掘調査の実施にむけ調整に入った。

平成19年７月10日に前橋市長より発掘調査依頼書が教育委員会に提出された。教育委員会では内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団に調査受諾の可否について打診したところ、調査団直営での実施は困難であるとの回答を受けた。

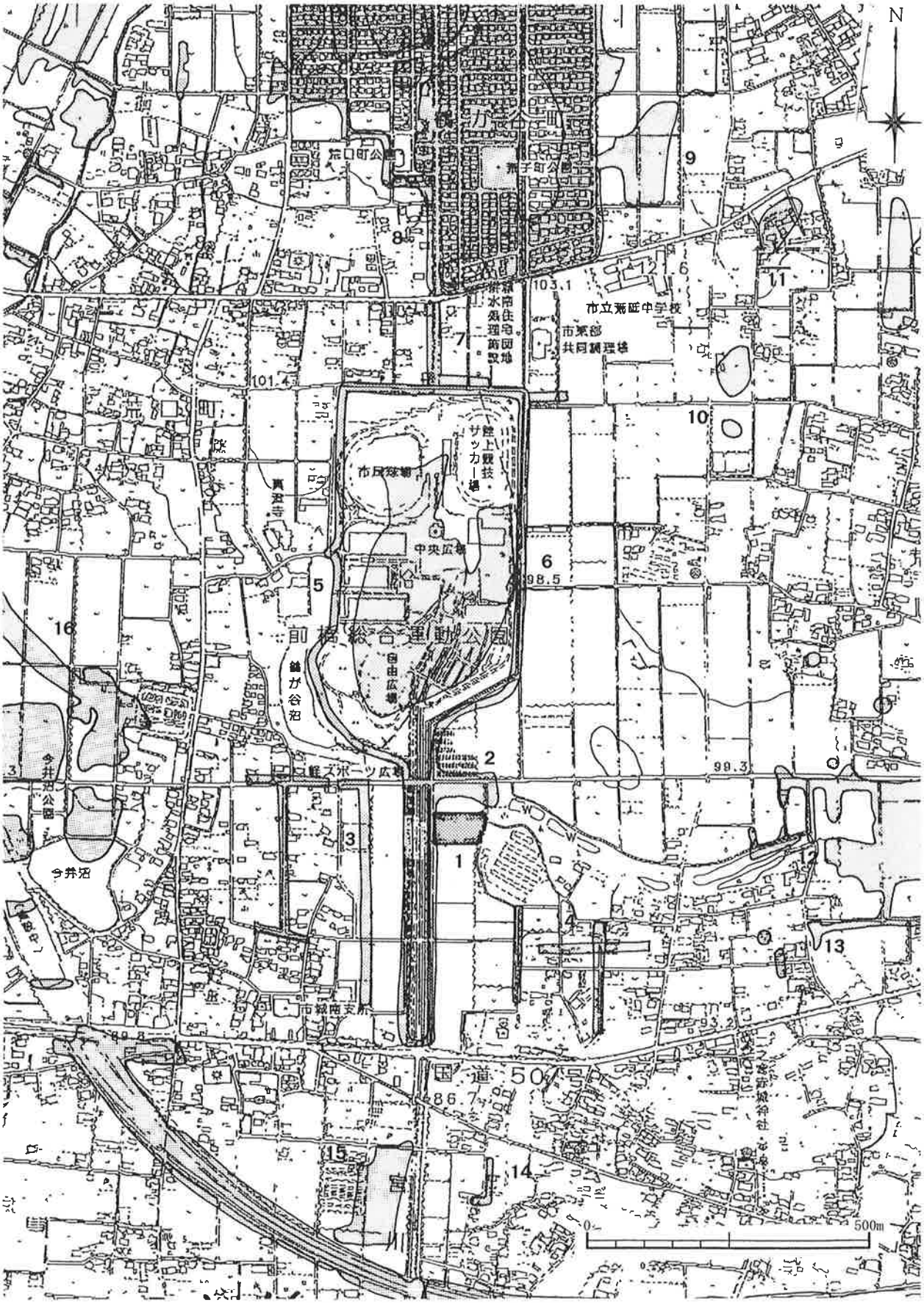
その結果、調査団では本発掘調査を民間発掘調査機関に依頼することとなり、依頼者の前橋市とも合意した。

平成19年10月３日に調査団と前橋市の間で埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結した。調査団は民間発掘調査機関である山武考古学研究所と10月４日に業務委託契約を締結した。10月11日より土木機械による表土掘削を開始した。

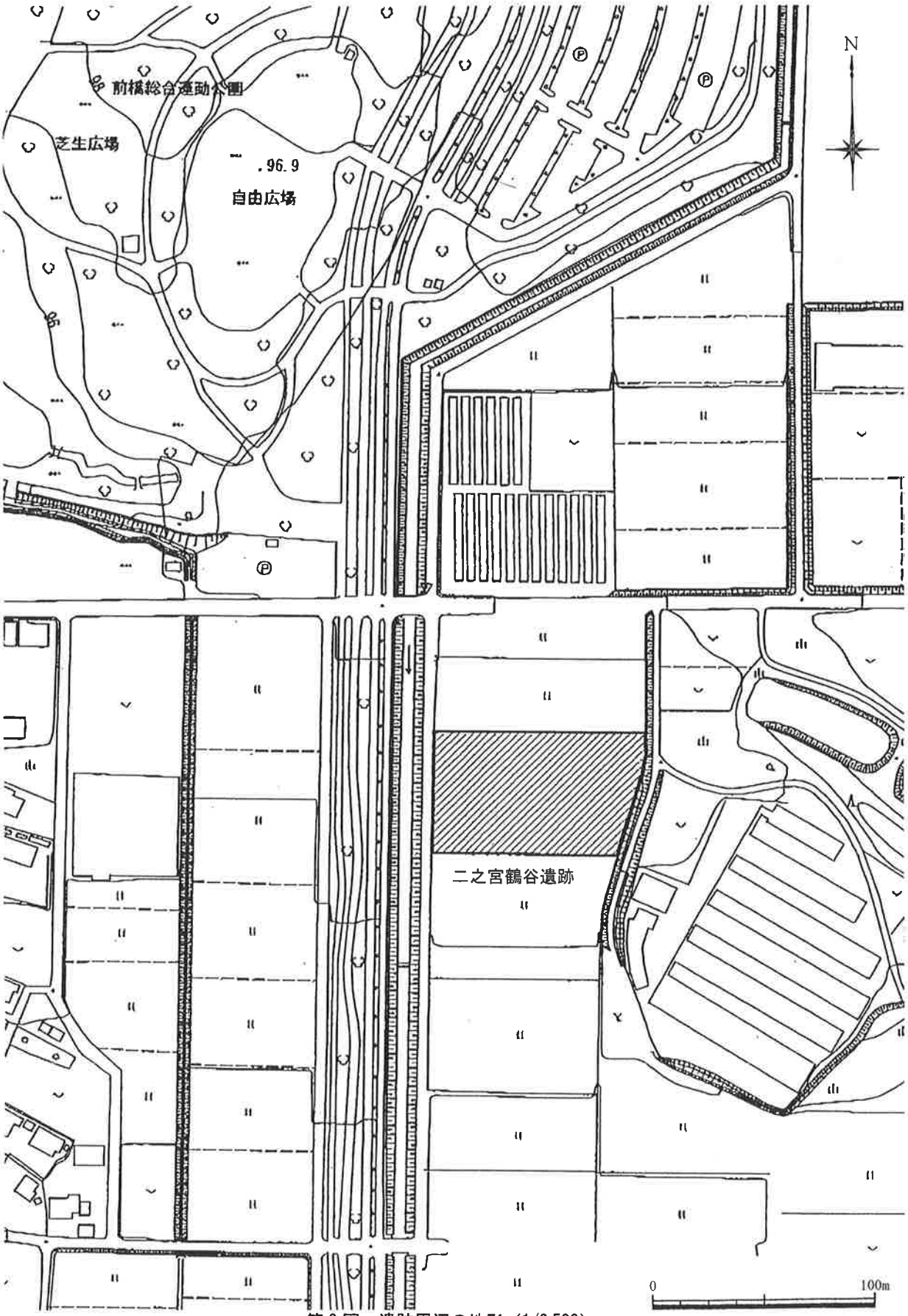
本調査を実施する遺跡の名称は、二之宮鶴谷遺跡である。「鶴谷」は旧地籍の小字名を採用している。



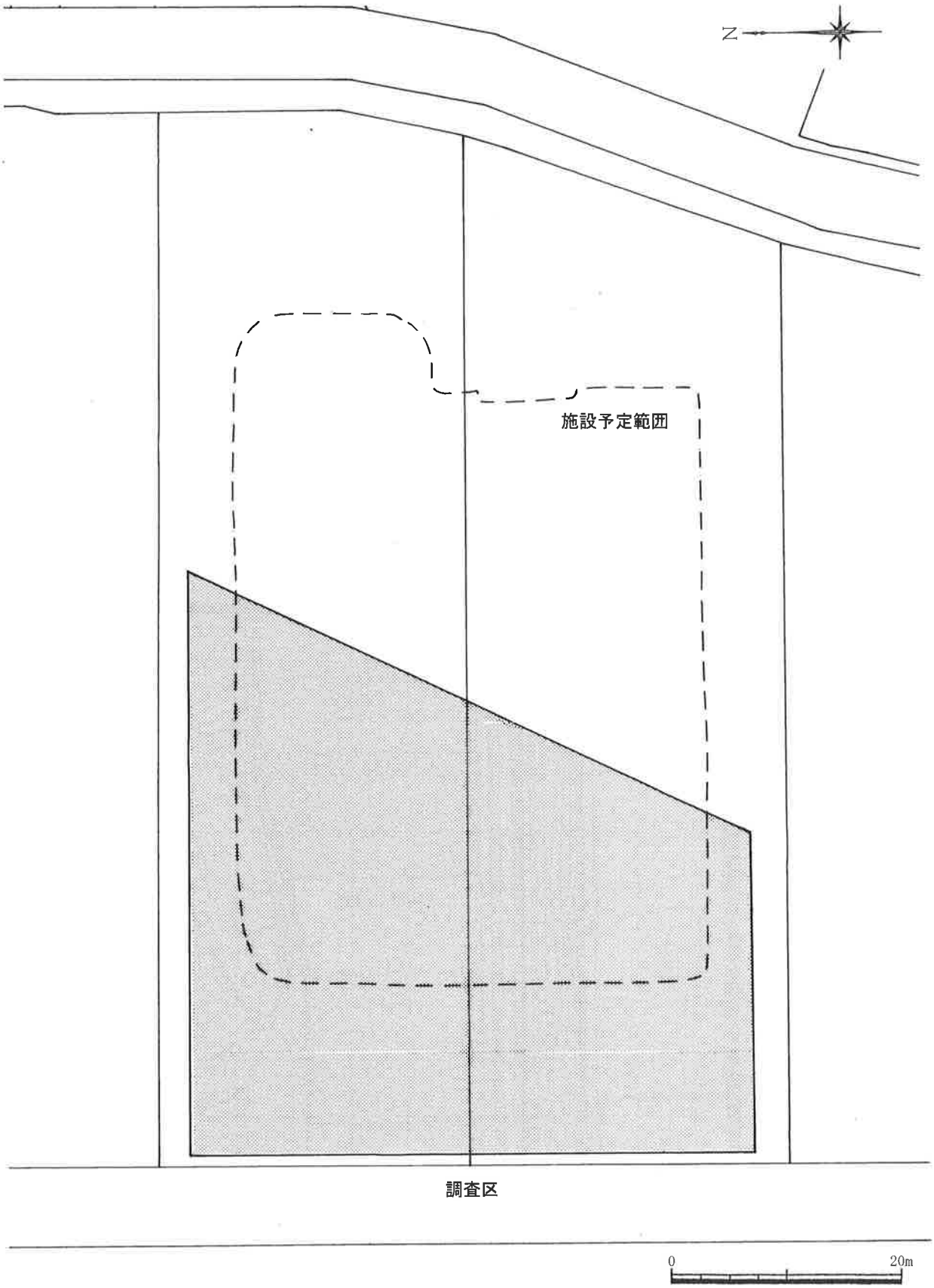
第１図　遺跡位置図（1/50,000）



第２図　遺跡と周辺の遺跡（1/1,000）



第３図　遺跡周辺の地形（1/2,500）



第４図　調査区域図（1/500）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の立地

二之宮鶴谷遺跡は、群馬県前橋市二之宮町88・89番地に所在し、前橋市市街地より南東へ約９km、JR駒形駅より北東へ約３kmに位置する。

周辺は、複合成層火山である赤城山（標高1,828m）の南側に広く広がる丘陵性台地となっており、丘陵性台地には荒砥川をはじめとする中小河川により浸食された谷が樹枝状に発達している。これらの樹枝状に発達した谷の内、本遺跡は小河川である宮川によって形成された谷間の沖積地に立地している。宮川は遺跡より北へ約2.5kmの地点を始点とし、沖積低地を形成しながら南北方向に走流して、遺跡より南へ３kmで荒砥川と合流する。現状での宮川の谷間は遺跡より北で幅が100m前後で、遺跡周辺で狭まり幅50m前後、遺跡より南では北西方向からの支谷と合流して幅200～300mとなる。中世以前の谷幅はもう少し狭かったと思われるが、遺跡付近で谷幅が狭くなるのは変化していないと推測される。谷の両側に存在する丘陵性台地は後期更新世後半に形成された扇状地が浸食された地形で、全体として南へと緩やかに傾斜している。

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺では、多くの遺跡が発掘調査されており、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている。中でも近隣の遺跡としては北方に鶴谷遺跡・鶴谷Ⅱ遺跡・荒砥大日塚遺跡Ｃ地区、西方に荒砥大日塚遺跡Ａ地区、東方に荒砥大日塚遺跡Ｂ地区、南方に荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡などが存在し、この他に遺跡北側に接して女堀が東西方向に走向している。

本遺跡では、古墳時代と古代の遺構・遺物が検出されており、周辺の古墳時代から古代の遺跡は集落址と水田址が存在している。集落址は鶴谷遺跡・鶴谷Ⅱ遺跡・荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡・荒砥大日塚遺跡Ａ地区・荒砥大日塚遺跡Ｂ地区などで検出されており、いずれの遺跡も宮川の挟む丘陵性台地上に立地している。宮川流域の浅間山降下火山灰Ｂ軽石下の水田址は荒砥大日塚遺跡Ａ地区・荒砥大日塚遺跡Ｂ地区・荒砥大日塚遺跡Ｃ地区・荒砥洗橋遺跡等で検出されており、宮川の谷間は浅間山降下火山灰Ｂ軽石降下前において水田が広がっていたと考えられる。女堀は赤城山南麓の丘陵性台地を掘削して構築された堀で、前橋市上泉町に端を発し、佐波郡東村に至る総延長13kmに及ぶ長大な溝で、中世初頭に構築された未完成の農業用水路と推測され、発掘調査が実施された女堀の内、本遺跡は二之宮地区大日塚と呼称される調査区に接している。

第１表　周辺の遺跡

番号	遺跡名	時期遺構	番号	遺跡名	時期遺構
1	二之宮鶴谷	平安水田址	9	頭無	古墳・平安住居
2	女堀二之宮地区大日塚	中世女堀	10	荒砥下押切Ⅰ	奈良住居
3	荒砥大日塚遺跡A地区	古墳から平安住居・平安水田	11	荒砥下押切Ⅱ	古墳住居・平安住居・円墳
4	荒砥大日塚遺跡B地区	古墳から平安住居・平安水田	12	宮後	平安畑・中世女堀
5	鶴谷Ⅱ	弥生・古墳・奈良・平安住居・中世女堀	13	女堀二之宮地区上の坊	平安畑・中世女堀
6	鶴谷	古墳・平安住居	14	荒砥宮西	古墳～平安住居
7	荒砥大日塚遺跡C地区	古墳・平安住居・平安水田址	15	荒砥洗橋	古墳・奈良・平安住居
8	柳久保遺跡群	旧石器・縄文・古墳～平安住居・円墳・平安水田址	16	女堀荒口地区前原	中世女堀・平安畑

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査方法

表土の除去作業は、重機を使用し、遺構確認作業・遺構調査は人力により実施した。

調査区は、８×８ｍの方眼網を被せ、これを基準とした。方眼網の基点は国家公共座標（世界測地系）第Ⅸ系Ｘ＝41544.000、Ｙ＝－60336.000とし、Ｘ軸を西よりＸ０・Ｘ１・Ｘ２・・・、Ｙ軸を北よりＹ０・Ｙ１・Ｙ２・・・とし、北西交点を各区の名称とした。

実測図は、遺構平面図が1/40の縮尺、土層断面図が1/20を基本とした。遺構配置図は1/200とし、等高線は５cm間隔とした。

写真は、35mmモノクロ・35mmカラーリバーサルを使用し、遺跡の全体写真は航空撮影を実施した。

第２節　調査の経過

発掘調査は、平成19年10月11日より開始し、同年10月25日に終了した。

10月11日（木）機材を搬入する。浅間山降下火山灰Ｂ軽石上面まで重機による表土除去作業を開始する。
10月12日（金）表土除去作業を継続し、遺構確認作業を開始する。
10月13日（土）表土除去作業を継続し、遺構確認作業を継続する。
10月15日（月）表土除去作業を継続し、遺構確認作業を継続する。
10月16日（火）表土除去作業と遺構確認作業を継続、遺構調査作業を開始する。
10月17日（水）表土除去作業・遺構確認作業・遺構調査作業を継続する。
10月18日（木）表土除去作業・遺構確認作業・遺構調査作業を継続する。
10月19日（金）表土除去作業・遺構確認作業・遺構調査作業を継続する。基準方眼杭およびＢ.Ｍを設定する。
10月20日（土）遺構実測を開始する。
10月22日（月）遺構調査を終了し、遺構調査・遺構実測を継続する。
10月23日（火）遺構調査・遺構実測を継続する。
10月24日（水）遺構調査・遺構実測を継続する。調査区全体の航空撮影を行う。
10月25日（木）遺構調査・遺構実測を終了し、調査を終了する。機材撤収。

第３節　基本層序

今回の調査区は、全体に近年の圃場整備の影響が認められ、一部の層位は削平され、消失しているものと考えられる。削平は谷の両岸の丘陵性台地部が著しく、ローム層上位まで削平されており、その直上に圃場整備の盛土が認められており、谷間部分においても多少なりとも削平が及んでいると考えられる。

基本土層は、Ⅰ層からⅩ層まで確認しており、この内Ⅰ・Ⅱ層が圃場整備時の盛土と元耕作土、Ⅳa・b・cの３層が浅間山降下火山灰であるＢ軽石層とそれの伴う灰層、Ⅴ層の上面が水田址構築面、Ⅵ・Ⅶ層が古墳時代以前の谷を埋める沖積層、Ⅷ・Ⅸ層がローム層、Ⅹ層が基盤となる砂質凝灰岩層となる。Ⅰ・Ⅱ層は調査区全域を覆っているが、Ⅲ～Ⅶ層は谷間部分のみ確認され、Ⅷ・Ⅸ層は谷間両岸の丘陵台地部に確認されただけで、谷間の中央の一部においては浸食により消失している。

基本層序は、次の通りである。

Ⅰ層　現代の耕作土

Ⅱ層　褐色土　圃場整備時の盛土である。

Ⅲa層　暗褐色土　浅間山降下火山灰Ｂ軽石をやや多く含む。砂質で、粘性はやや不良、締まりは良好である。酸化層

Ⅲb層　暗褐色土　浅間山降下火山灰Ｂ軽石をやや多く含む。砂質で、粘性はやや不良、締まりは良好である。

Ⅳa層　青灰色灰層　浅間山降下火山灰Ｂ軽石に伴う灰層で、粘性は不良、締まりはたいへん良好である。

Ⅳb層　紫灰色灰層　浅間山降下火山灰Ｂ軽石に伴う灰層で、粘性は不良、締まりはたいへん良好である。

Ⅳc層　浅間山Ｂ軽石層

Ⅴ層　黒色粘質土　浅間山降下火山灰Ｃ軽石・榛名山二ツ岳降下火山灰ＦＰ軽石が少量含まれる。粘性はたいへん良好で、締まりも良好である。上面が遺構確認面及び検出面となり、水田址の耕作土に相当すると考えられる。

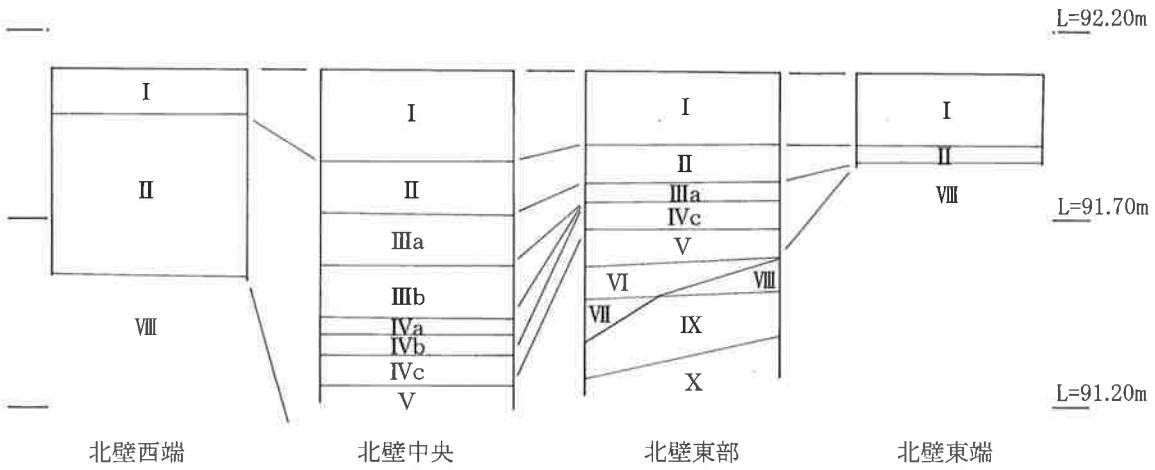
Ⅵ層　黒褐色土　浅間山降下火山灰Ｃ軽石がやや多く含まれる。粘性は良好で、締まりも良好である。古墳時代前期に形成された層と推測される。

Ⅶ層　黒色土　白色微粒をやや多く含む。粘性はやや不良、締まりは良好である。弥生時代以前に形成された層と思われる。

Ⅷ層　黄色ローム層

Ⅸ層　灰褐色ローム層

Ⅹ層　黄色砂質凝灰岩層



第５図　基本層序

第Ⅳ章　遺構・遺物

調査では、縄文時代・古墳時代から中世にかけての遺構・遺物が検出・出土している。縄文時代・古墳時代では遺物が微量出土しているが、遺構や包含層は存在しない。古代では浅間山降下火山灰Ｂ軽石層下の水田址と溝が検出されており、遺物は土師器・須恵器が中世以降の溝の覆土より微量出土している。中世以降では溝が検出されており、遺物として圃場整備時の盛土より青磁片１点と五輪塔１点が出土している。

水田址（第6・7図　図版2、3－1）

水田址は、基本層序Ⅳｃ層直下のⅤ層上面より検出され、調査区中央部を北東から南西に走向する谷底の範囲に分布し、調査区の北西部および東部の丘陵性台地部には認められていない。水田址のある谷底は全体に谷中央部に向かいやや沈下しており、水田面は水平にならず微妙に傾斜する傾向が認められる。また、水田址は宮川の旧河道であるSD06、中世以降に構築された溝であるSD02・03・05により切られている。

畦畔は、遺存状況が悪く、削平等により部分的に残存するだけで、各水田の区画形状が明らかな例はほとんど無い。残存した畦畔より推測される区画形状は多様で、谷中央部と縁辺部では異なる。谷中央部の区画は畦畔が谷筋を横断する例が多く、谷筋に対して長軸方向を直交にとる長方形或いは台形を呈していたと推定され、区画内の面積は縁辺部の区画よりも広いと推測される。縁辺部の区画は谷筋に対して長軸が平行する例が多く、形状は小規模な不定形を呈し、各区画は僅かながら谷底に向かい階段状に下がっていくようで、地形をうまく利用した様相を成している。遺物は水田面直上より縄文土器１点と石器２点が出土している。

水利関連の遺構は、水田址より水口２ヶ所と水田址北東部の縁辺部より灌漑用の溝SD01が検出されている。水口１は水田址北西部のＸ２Ｙ１区に所在し、比較的大きな規模の区画の南西隅に位置する。水口の幅は上場58cm、下場４cmで、水口付近では上流側と下流側との比高差はほとんど無く、ほぼ平坦であるが、水田址全体としては数～10cmの比高差が存在する。水口２は水田址南西部のＸ１Ｙ４区に所在し、比較的大きな規模の区画の南西隅に位置する。水口の幅は上場30cm、下場14cmで、水口付近では上流側と下流側との比高差はほとんど無く、ほぼ平坦であるが、水田址全体としては数～10cmの比高差が存在する。

SD01（第7・8図　図版3－2・3、4）

本溝は、水田址北東縁辺部の浅間山降下火山灰Ｂ軽石層下より検出されている。北東から南西を等高線に平行する形で、蛇行しながら走向する。中央部よりやや北寄りを試掘トレンチに切られるが、総延長28mほどが検出されており、本来は谷筋に沿って更に南へと延びていたものと推定される。溝は西側に畦畔が接して存在し、溝の西壁と畦畔が一体化しており、中央部と南部に水口が各１ヶ所計２ヶ所検出されている。溝の断面形は幅60～90cm×深さ3～10cmの皿状を呈する。水口Ａは溝の中央部の西斜面上に位置し、幅95cmで、西方向に開き、水口の南側の畦畔はＬ字形に屈折している。水口Ｂは溝の南部の北西斜面上に位置し、幅40cmで、北西方向に開いている。

SD02（第6・9図　図版5-1）

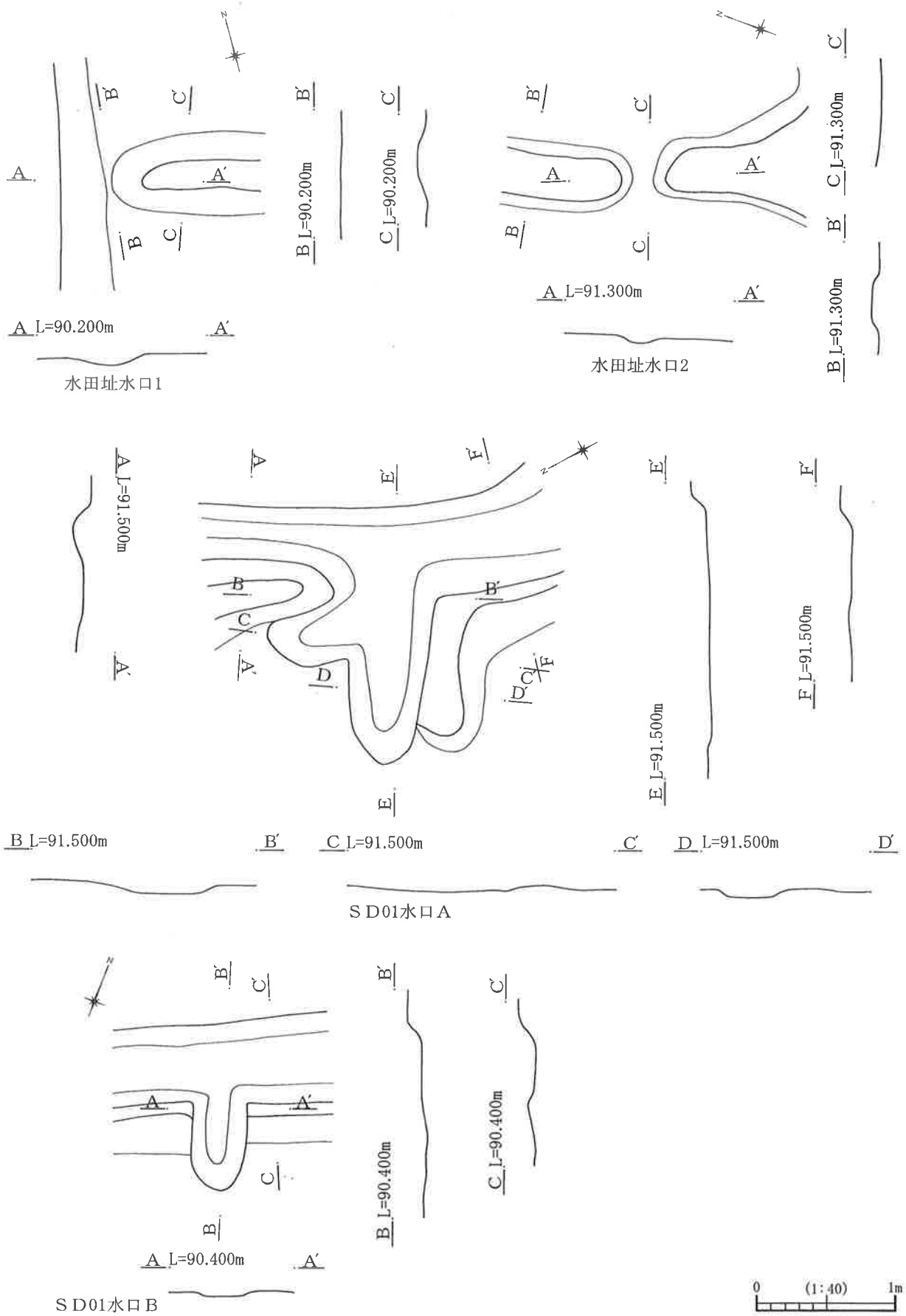
谷底の西縁辺部を北東から南西へと谷筋に沿ってほぼ直線的に走向し、北端および南端は調査区外へと延びる。重複関係は浅間山降下火山灰Ｂ軽石層およびその直下の水田址を切り、SD03・SD06に切られる。断面形状は幅90cm×深さ20cmの皿状を呈している。遺物の出土は無く、構築時期は浅間山降下火山灰Ｂ軽石層以降である。

SD03（第6・9図　図版5－2・3）

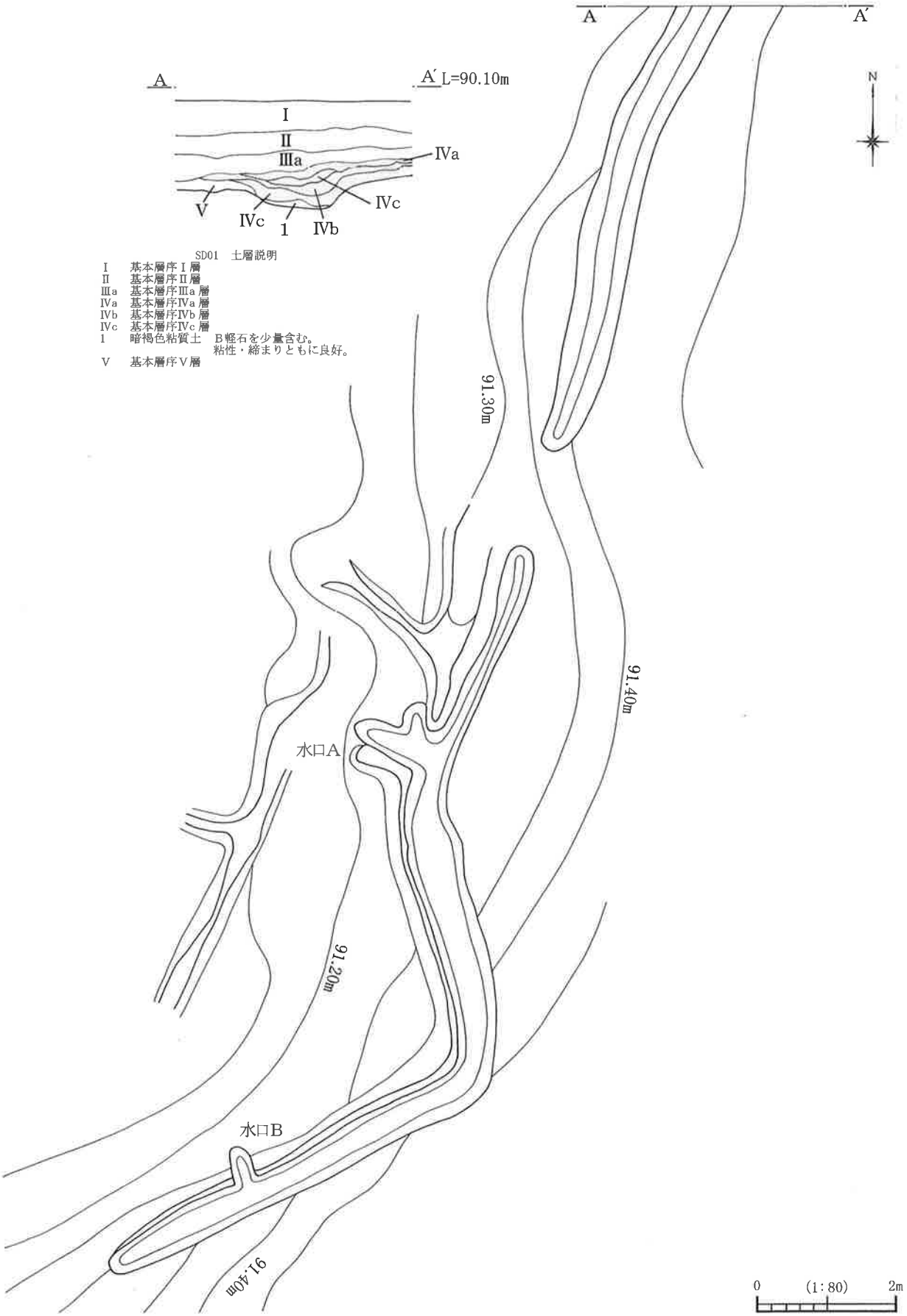
谷底の中央を北から南へとほぼ直線的に走向し、北端は調査区外へと延び、南端はSD06に切られている。重複関係は浅間山降下火山灰Ｂ軽石層およびその直下の水田址・SD02を切り、SD06に切られる。断面形状は幅120cm×深さ10cmの皿状を呈している。遺物の出土は無く、構築時期は浅間山降下火山灰Ｂ軽石層以降である。

A
A′ L=92.20m
Y1(X=41536)
Y2(X=41528)
Y3(X=41520)
Y4(X=41512)
Y5(X=41504)
Y6(X=41496)
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
水口1
水口2
トレンチ
91.30m
91.20m
91.10m
91.00m
90.80m
90.90m
91.40m
91.50m
91.60m
91.70m
ローム露出範囲
N
0
1:250
10m
X1 Y=-60328
X2 Y=-60320
X3 Y=-60312
X4 Y=-60304
X5 Y=-60296
X6 Y=-60288
X7 Y=-60280
攪乱
VI層以前の溝露出範囲

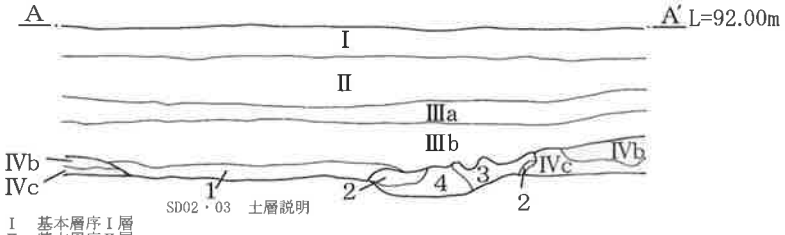
第６図　遺構配置図



第７図　水田址水口・SD01 水口

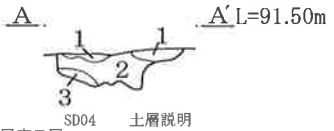

A
A′
A
A′ L=90.10m
I
II
IIIa
IVa
IVc
V
IVc
1
IVb
SD01 土層説明
I 基本層序Ⅰ層
II 基本層序Ⅱ層
IIIa 基本層序IIIa層
IVa 基本層序IVa層
IVb 基本層序IVb層
IVc 基本層序IVc層
1 暗褐色粘質土 B軽石を少量含む。
粘性・締まりともに良好。
V 基本層序Ⅴ層
N
91.30m
91.40m
水口A
91.20m
水口B
91.40m
0 (1:80) 2m

第8図 SD01



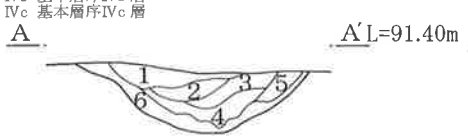
SD02・03　土層説明

Ⅰ　基本層序Ⅰ層
Ⅱ　基本層序Ⅱ層
Ⅲa　基本層序Ⅲa 層
Ⅲb　基本層序Ⅲb 層
1　暗褐色土　B 軽石を少量含む。SD03 覆土。
2　黒色粘質土　基本層序Ⅴ層ブロック。B 軽石少量混入する。SD02 覆土。
3　B 軽石再堆積層　暗褐色土粒を少量含む。SD02 覆土。
4　紫灰色灰層　B 軽石状部の灰層ブロックの崩壊し、再堆積した層。暗褐色土粒少量混入。SD02 覆土。
Ⅳb　基本層序Ⅳb 層
Ⅳc　基本層序Ⅳc 層



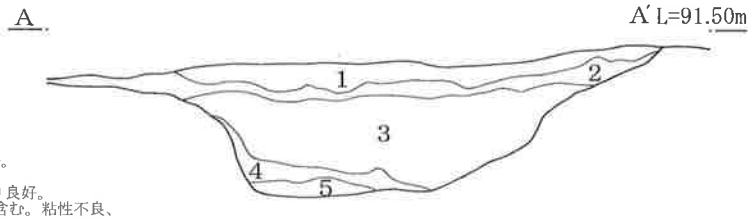
SD04　土層説明

1　基本層序Ⅱ層
2　黒褐色土　砂塊Φ1 ～ 2cm やや多く含む。粘性有り、締まり良好。
3　灰褐色シルト　砂粒を多く含む。粘性不良、締まり有り。



SD05　土層説明

1　灰褐色土　B 軽石を少量混入する。粘性有り、締まり良好。
2　黄褐色ロームブロック層
3　灰黄褐色土　灰黄褐色砂をやや多く含む。粘性不良、締まり良好。
4　黄褐色土　ロームブロックΦ2cm、黒褐色土粒、砂を多く含む。粘性不良、締まり良好。
5　灰褐色土　砂を多く含む。粘性不良、しまり良好。
6　黒褐色土　砂少量含む。粘性良好、締まり有り。

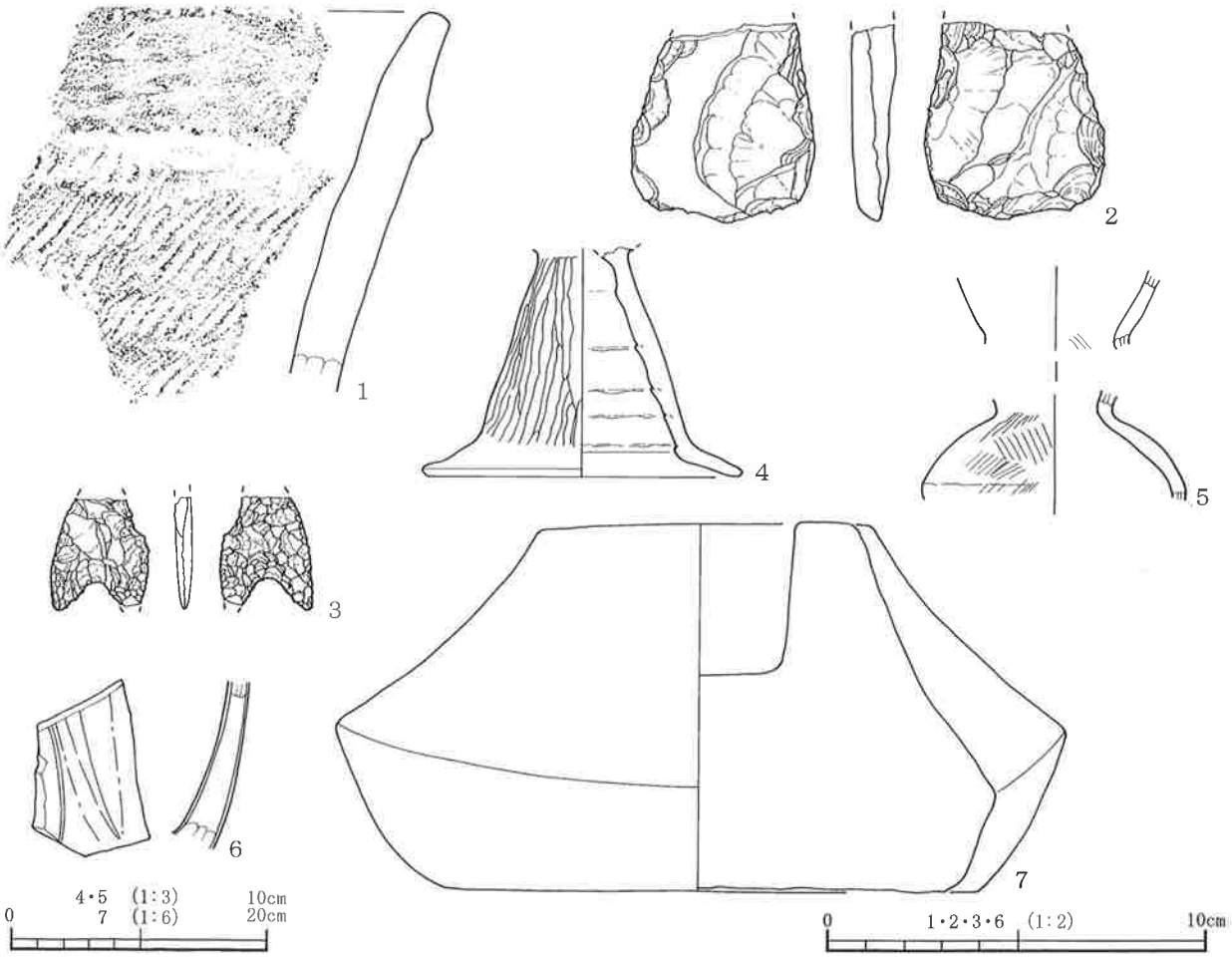


SD06　土層説明

1　暗褐色土　B 軽石を少量混入する。粘性・締まりともに良好。
2　灰色砂層
3　黄灰色砂層　粗砂で、層厚の薄いシルト層が互層ではいる。
4　灰褐色粘質土　砂を微量覆。粘性良好、締まり有り。
5　黄灰色細砂層

第 9 図　溝セクション図

0　(1:40)　2m



第 10 図　出土遺物

SD04（第6・9図　図版6－1.2）

東側の丘陵性台地の調査区外から延びてきており、調査区に入ってすぐに南南西に曲がり、そこより直線的に走向し、北端および南端は調査区外へと延びる。断面形状は幅60～150cm×深さ22cmのU字状を呈し、底面には大小のポットホールが存在し、覆土の砂層より流路と考えられる。遺物は磨耗した土師器の細片が出土している。構築時期は覆土中に浅間山降下火山灰B軽石が混入していることより、降下以降の中・近世の時期と思われる。

SD05（第6・9図　図版6－3、7－1）

東側の丘陵性台地を北東から南西へと蛇行して走向し、北端および南端は調査区外へと延びる。断面形状は幅60～200cm×深さ32cmのU字状を呈している。覆土の砂層より流路と考えられる。遺物の出土は無い。構築時期は覆土中に浅間山降下火山灰B軽石が混入していることより、降下以降の中・近世の時期と思われる。

SD06（第6・9図　図版7－2・3）

谷底を北東から南西へと僅かに蛇行しながら走向する。断面形状は深さ70cmのU字状を呈する。重複関係は水田址とSD02・03を切る。覆土の砂層より流路と考えられる。遺物の出土は無い。浅間山降下火山灰B軽石層を切ることより、降下以降の中・近世の時期と思われる。

遺物（第10図　図版8）

１は加曾利EIV式の鉢片である。２は石斧で、基部を欠損。３は石鏃で、先端を欠損。４は古墳時代土師器高坏である。５は古墳時代土師器小型壺である。６は龍泉系青磁碗Ⅰ－５類である。７は五輪塔火輪である。

第２表　土器観察表

番号	出土地点	器種	特徴	色調	胎土	備考
1	X2Y1	縄文土器鉢	口縁部下に隆起線。斜縄文。	灰白色	砂粒多	
4	X0Y3	土師器高坏	外面ケズリ。内面粘土接合痕。裾部横ナデ。	赤橙色	砂粒多	
5	X0Y3	土師器小型壺	同外面櫛目、内面ナデ。口縁部外面ナデ、内面ナデ。	赤橙色	砂粒多	口縁と胴接合できず
6	X1Y3	青磁碗	鎬蓮弁文碗。	緑灰色	灰色地	龍泉窯系碗Ⅰ－５類

第３表　石器・石製品観察表　　（）は残存する法量

番号	出土地点	器種	特徴	石材	重量g	長さ・高さ×幅cm
2	X2Y1	石斧	撥形を呈すと思われる。基部を欠損。	頁岩	30.34	(5.2) ×4.8
3	X2Y2	石鏃	先端部を欠損。抉りが深く、厚さは薄い。	頁岩	3.17	(3.0) ×2.4
7	表採	五輪塔	火輪部で、軒厚が軒端に向かい厚みを増し反る。	安山岩	12000	14.4×28.8

第Ⅴ章　まとめ

調査の成果としては、古代の狭い谷地における水田の様相が推測できる資料を検出できたことがあげられる。谷地内の水田は二つの形態が見られ、平坦面を広く取れる谷中央部は区画形状の整った比較的規模の大きな水田、斜面の始まる谷の縁辺部は地形に合わせて段々畑状となる区画形状が不定形の小規模な水田となり、両者の存在により狭い空間を有効利用していることがわかる。水利に関して、谷縁辺部の段々畑状となる水田ではSD01の存在より丘陵性台地下部に用水を巡らしていることより明らかであるが、谷中央部の水田では用水が未検出で、無かった可能性が存在する。この検出状況より二つの水利方法が考えられる。ひとつは用水路により上流部谷底から下流の谷縁辺部の比較的高い位置に存在する水田へと水を導き、そこより更に谷中央部の水田へとかけ流し、ある程度の範囲に水が行き渡った時点で、再度谷中央部水田の水を用水路に集め、下流の谷縁辺部の高い位置の水田まで水を導くということを反復する水利方法である。もうひとつは谷中央部をかけ流しのまま上流から下流へと水を導き、谷縁辺部の水田は別に用水路を用いるというような二つの水利系統が併存する方法が考えられる。両者は今回の調査では解決できない問題で、今後、宮川流域の調査が進展し、解決できることを期待したい。

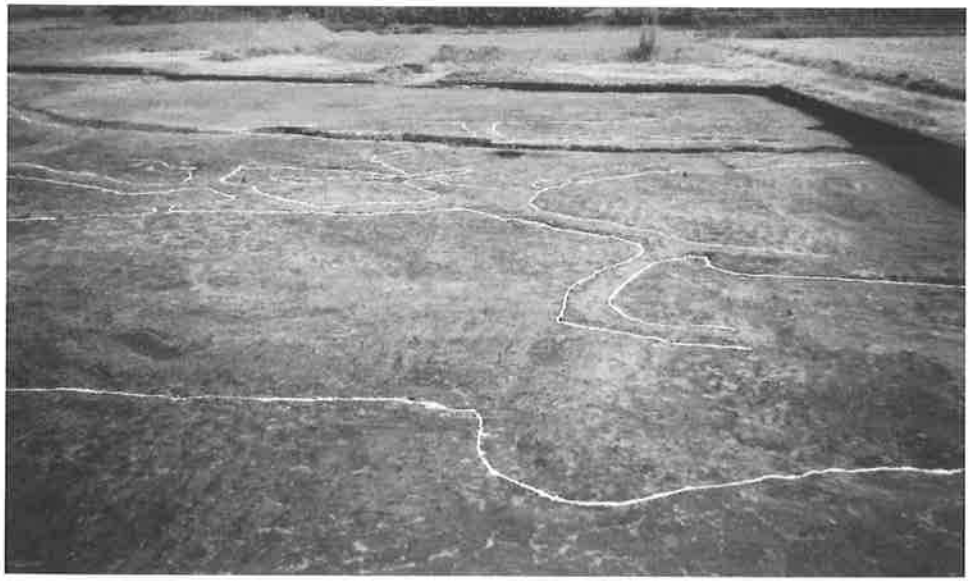
図版1

1　全景

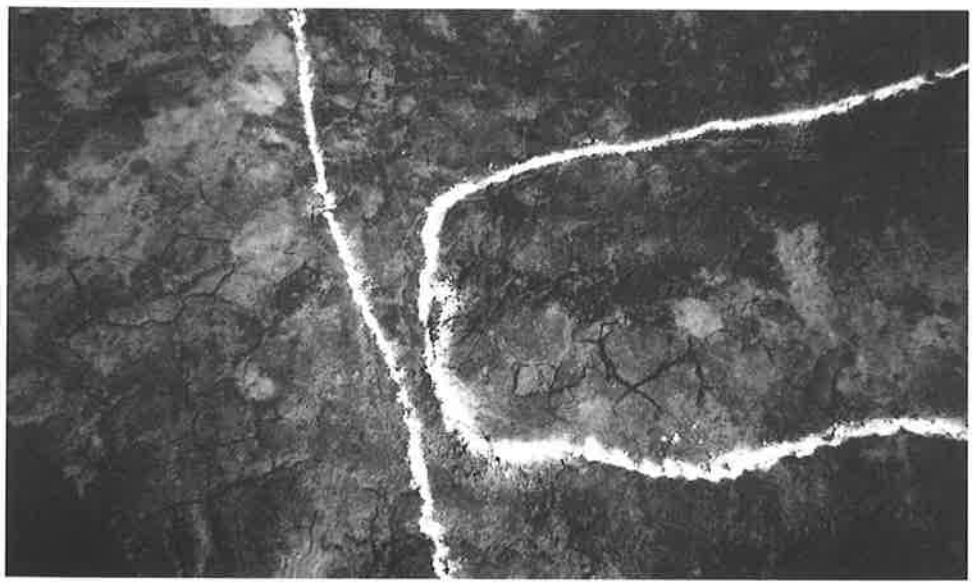
2　遠景　南から

図版2

1　水田址北部近景
南から

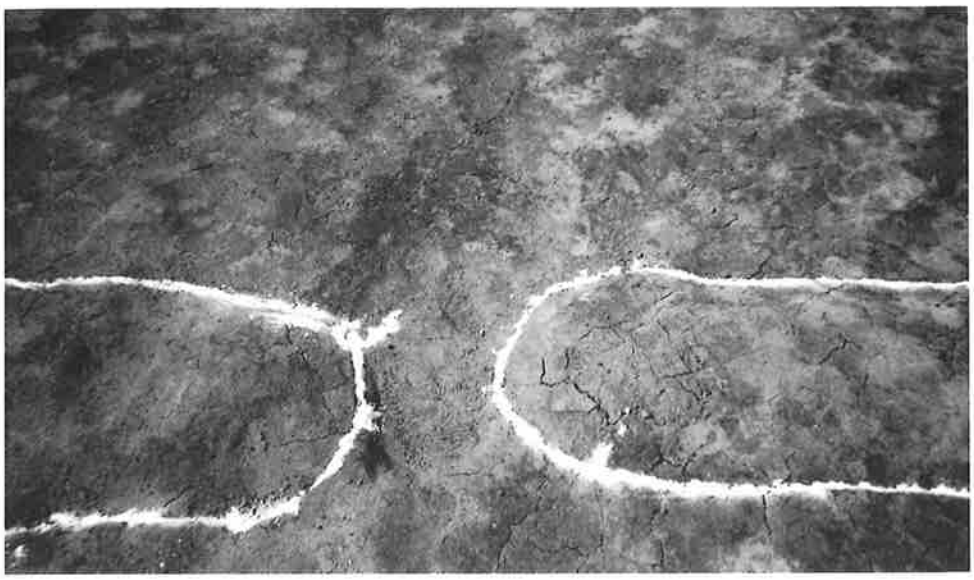


2　水田址南部近景
西から

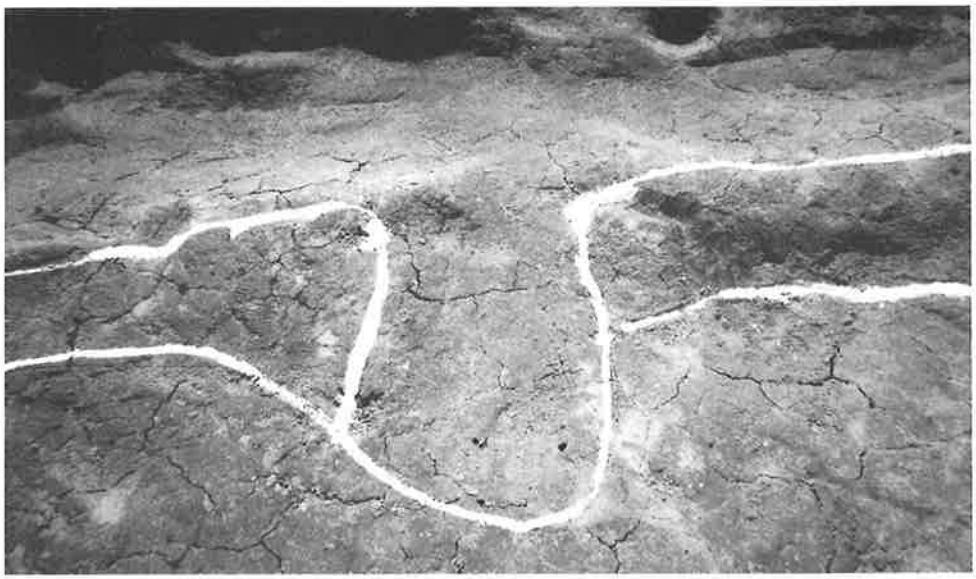


3　水口1
南から

図版3



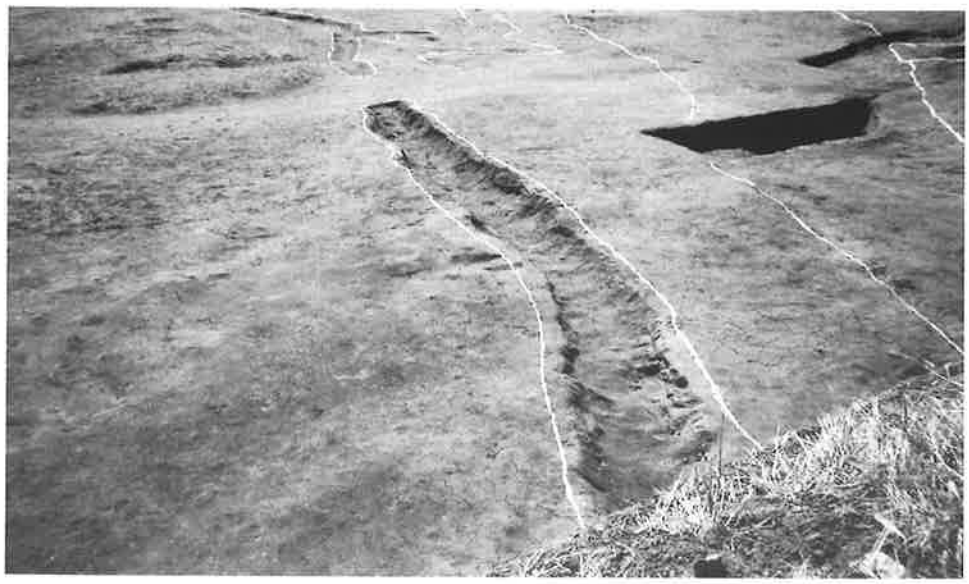
1　水口2
北から



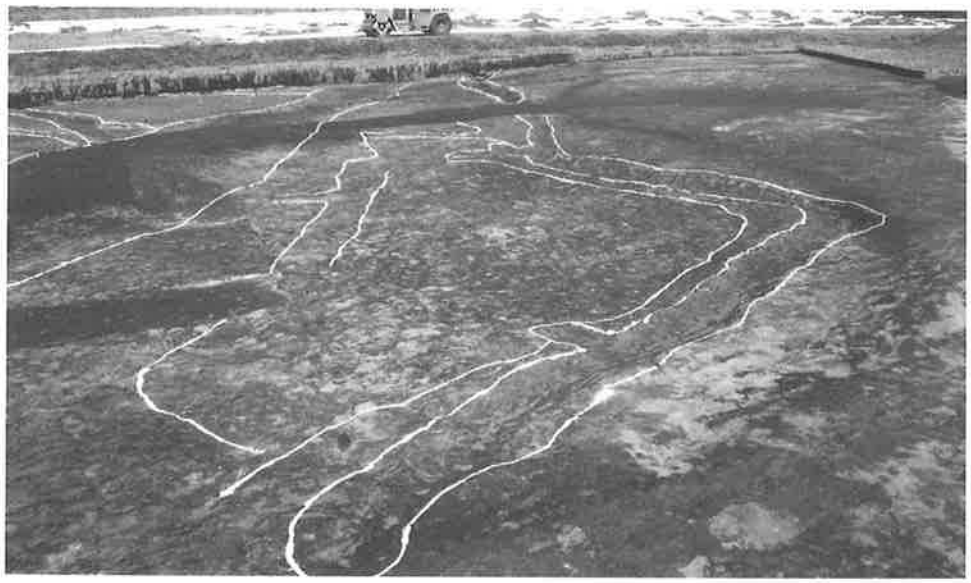
2　水口B
西から

3　水口A
南から

図版4



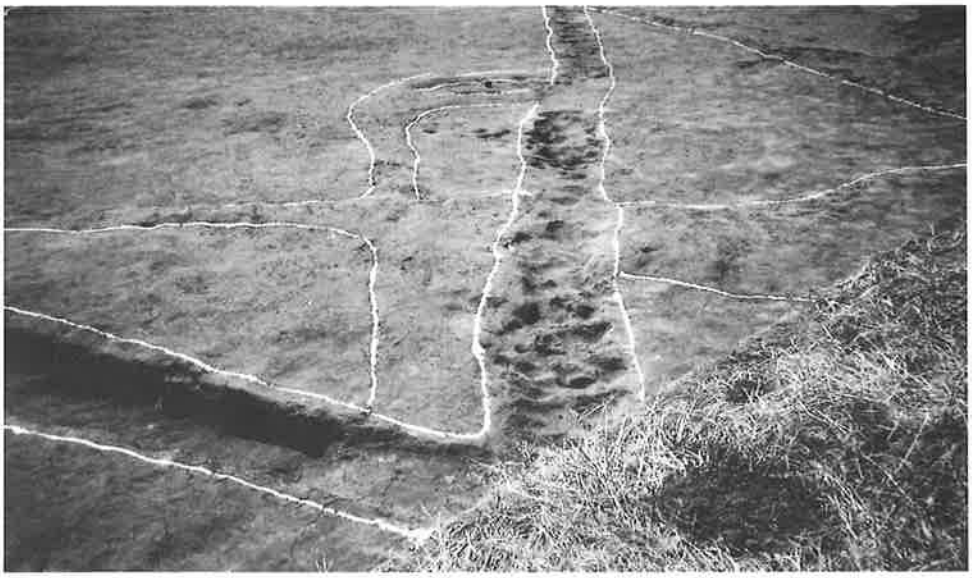
1　SD01
北から



2　SD01
南から

3　SD01
セクション
南から

図版5



1　SD02
北から

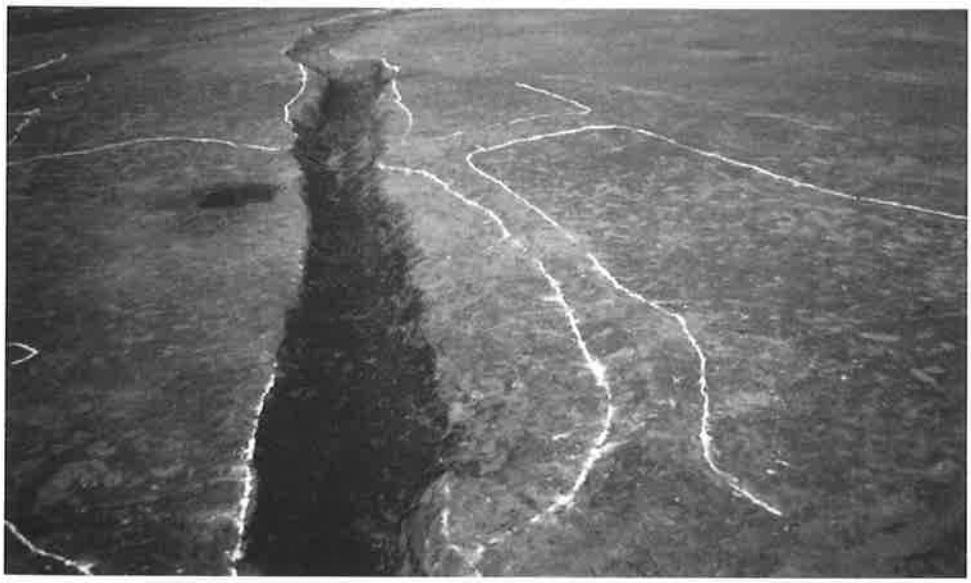
2　SD03
北から

3　SD02・03
セクション
南から

図版6

1　SD04
北から

2　SD04
セクション
北から



3　SD05
南から

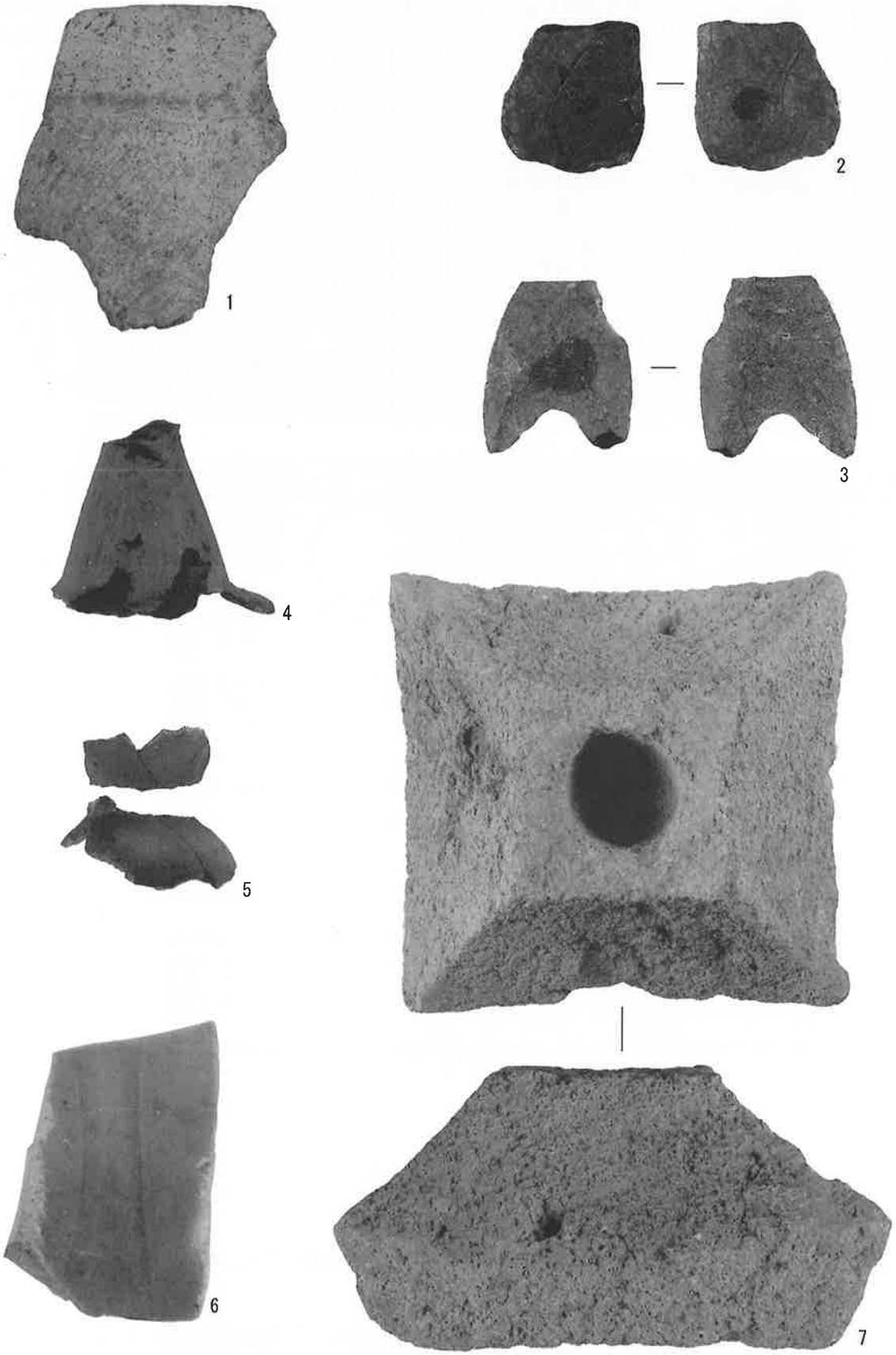
図版7

1　SD05
セクション
北から

2　SD06
北から

3　SD06
セクション
南から

図版8



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	にのみやつるがやいせき
書名	二之宮鶴谷遺跡
副書名	村づくり交付金事業荒砥北部地区汚水処理施設場建設に伴う埋蔵文化財調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	梅沢克典　折原洋一
編集機関	山武考古学研究所
所在地	〒286－0045　千葉県成田市並木町221番地
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
発行機関所在地	〒371－0018　群馬県前橋市三俣町二丁目10－2
発行年月日	平成19年12月20日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
にのみやつるがやいせき 二之宮鶴谷遺跡	ぐんまけんまえばししにのみやまち88ほか 群馬県前橋市二之宮町88他	10201	19E49	36° 2′ 20″	139° 9′ 40″	20071011 ～ 20071025	2000㎡	汚水処理場建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二之宮鶴谷遺跡	水田址	縄文時代 古墳時代 平安時代 中世	水田址　溝	縄文土器・石斧・石鏃 土師器・須恵器 青磁・五輪塔	B軽石下水田址

二之宮鶴谷遺跡

印刷　平成19年12月15日
発行　平成19年12月20日

編集　山武考古学研究所　Tel 0476-24-0536
発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
印刷　㈲京文社印刷　Tel 043-242-0064